

## 再び作者の磁場へ — シェイクスピアのキャンノンをめぐる —

境野 直樹

### 読者・テキスト・作者

あるテキスト（本）が誰によって書かれたか — ポスト構造主義はこの問いを不毛にする、つまりテキストを作者の意図から解放し、脱神話化する営みであった。「一つのテキストを解釈するということは、それに一つの意味（多かれ少なかれ大胆な）を与えるのではなく、反対に、それがいかなる複数から成り立っているかを評価することである。」（バルト）<sup>1</sup>すべての「読み」行為は解釈者の積極的な参入、すなわち「書くこと」の実践にほかならず、だとすればすべてのテキストの実践にはもはや秩序(authority: 作者の特権および authenticity: 「強い」読解)が存在しえず、そこには常にすでに繰り返される解体による意味の産出・発見・創出の連鎖 / 痕跡があるのみということになり、解釈史の彼岸に作者の姿やその生きた時代の様子を見極めようとする営みが、まるで蜃気楼のように遠くむなしく感じられたものだった。

だが、作者の肉声、確固たる作者像をテキスト（行為・本）の背後に求める読者の欲望は、そうした熱病のごとく記号の戯れに身を委ねる快樂に食傷気味となった現在、むしろかえって高まっているともいえるのではないか。記号の戯れからテキストの安定した静的な意味を回復し、たとえそれが暫定的なものにすぎないとの戦略的撤退を含蓄しつつもなお固定化しようとする営みは、テキストの歴史性の再評価とともに 1980 年代以降、新歴史主義という大きなうねりとなって活性化した。あるテキストを歴史的な文脈に（再）定位することを通じて、意味の織物（テキスト）の中の太い縦糸と横糸を峻別する読みの実現のために、今、作者と時代、および対象となるテキスト（本、以下注記なき場合はこの意味）の周辺（コン・テキスト）についての文学研究者のまなざしは、再び熱いものとなってきた。

ところが近世初期英国演劇の版本の成立事情に関していえば、ポスト構造主義者が小躍りしたくなるような状況が、歴史的事実として存在する。すなわち劇作家（ある作品をすべて一人で書くとはかぎらない）が自分の劇団のために書いたオリジナルの台本（これがそもそも定義しにくい）は劇団員達、写生字、検閲、印刷業者（順不同）といった多様な人間達の手を通過してはじめてモノとしての本になるわけで、さらに言えば実際の上演台本と今日現存する版本が同一であっ

た保証はましてない。それではいったい、われわれは何を研究するのかということになるわけだが、難解、かつ魅力的な多義性にむけて開かれたテキストを前にすると、解釈史の蓄積とともに時を越えて、今われわれの手元にたどり着いたテキストというものが、かかる成立事情にあるということ、ともしれば忘れがちである。

今日現存する多数の作者不詳の作品のなかには、読者のコンテキスト・興味関心のありかによって、突如魅力的な輝きを増すものがある。急いで付け加えなければならぬが、このことは冒頭で述べた「テキストの祝祭性」とでもいうべき読書体験とはかならずしも共鳴しない。そうではなくて、その作品が成立した文化史的背景を考察する上で、つまりその作品自体の歴史的文脈において、固有の意義が生じてくるようなテキスト、あるいは逆にコンテキストを活性化するようなテキストの存在が、ここでは問題となるのだ。もちろんそこには落とし穴がある。「読者にとって新鮮な関心・趣味」なるものが、その性格上「意味」の制度化、安定化をめざすたい流れの方向性をたえず横目で眺めつつも、そこから逸脱する方図をさぐることによって立ち起こってくると考えれば、読者のテイストを尺度として作品の「重要性」「価値」「歴史性」を決定するなどというのは、変数の多すぎる多項方程式に挑むようなものだろう。文学史の地図の書き換えには、やはり新たな解釈史の積み上げが必要なのである。そして壮大な解釈史が陳腐な遺産と思えるとき、あらたな書き換えへの衝動が起こるに違いない。ポスト構造主義のテキスト実践は、そうした見通しの中に息づくことで、文学史の活性化に寄与しているのだ。新歴史主義の流行とともに、それまで文学史的にはかえりみられることのほとんどなかった作品を再評価する風潮が高まったことは、たとえば1991年に相次いで世に出た Emrys Jones, ed., *The New Oxford Book of Sixteenth Century Verse* と Alastair Fowler, ed., *The New Oxford Book of Seventeenth Century Verse*, そして、それに先立つ Wells, et. al. eds., *The Oxford Shakespeare* (1986) の編集方針にたしかにみとれるのである。これらの16世紀、17世紀詩集はともに、文学史をエリート文化の独占状況から解放する試みであると同時に、傑作のコンテキストを提供することで、逆説的に傑作の再評価を通じて英文学のキャンソンを再構成することをも試みた画期的な計画であったと言える。だが英文学研究におけるこうした風潮の呼び水とも位置づけられるオックスフォード版シェイクスピア全集についてみれば、キャンソンの再構成とか、エリート主義的文学史からの解放などと浮き足立つ前に、わたしたちはよくよく用心深くあらねばならないことがわかってくる。(重大なことに、オックスフォード版の編者たちは、みずからの権威性に高い自意識を有する点でエリート主義的であ

る。)すなわち、誰がそれを書いたのか、という問題。ある時代に固有のひとつの声を特徴づけるためには、それが同時代の文脈のなかで、いかに固有の輝きを放っていたのかを際立たせなければならない。ふたたび作者へ、ふたたび authenticity の問題へ。以下本論では、不十分な根拠にもかかわらずシェイクスピア作としてオックスフォード版全集に収録された短詩 ‘Shall I die?’ と、それに加えてノートン版全集に収録された *A Funerall Elegye* が惹起した作者同定論争が、この二つの詩の作者をシェイクスピアではないとする結論にいたるまでの、学術的にフェアでない曲折を紹介し、次いでテキスト分析による作者同定研究の最近の二つの動向を確認することで、「今、なぜ作者なのか?」、「作者とはなにか」という問題を考えなおすための手がかり、ささやかな留意事項を確認しておきたいと思う。作者同定の作業がいかに wishful thinking に陥りやすいかということを、わたしたちは心に留めておかなければならない。

## 1 「新作」への渴望

1986年に出版されたオックスフォード版シェイクスピア全集は、その編集方針において従前の幾多のシェイクスピア全集とは一線を画したものであった。すなわち、編纂史において繰り返し指摘されてきた、いわゆる合成本文の問題に、初めて正面から切り込んだのである。作者の死後、Nicholas Rowe にはじまる後世の編纂家達によって、現存する folio や quarto を継ぎはぎし、綴字法や句読点にいたるまで現代化され再構成された代物をシェイクスピアの本文とする受容史に、少なくとも作家がそういう合成本文を意図した証拠は残されていないとして異議を唱え、上演当時の作者の意図に可能な限り近づこうとした志は、しかしながら残念なことに、成功とは言い難い結果をもたらした。「オリジナルへの回帰」への願望があらたなるフィクションをもたらしてしまったからである。綴りを現代化した版とは別に編まれた “Original Spelling Edition” のフラップには（それこそ筆者不明の）以下のような諷い文句がみてとれる。

The original-spelling edition of the Complete Oxford Shakespeare offers a *fully edited text* using the spelling and punctuation of whichever early edition *seems closest to Shakespeare's manuscript*. Stage directions are more conservatively reproduced than in the modern-spelling edition. Emendations use the spelling conventions of the original text or, *when it can be conjectured, of the manuscript underlying it*. . . This edition makes it possible to read an ‘ideal’ text of

*Shakespeare's works as they would have appeared in his own time.* [斜体は筆者]<sup>2</sup>

シェイクスピアの草稿（現存しない）にもっとも近いと思われ、作者の生前に存在したであろうとおりに徹底的に編纂された「理想的な」テキスト！これが無茶な目標設定であることは自明であろう。たとえば folio (F1 が既にシェイクスピアの死後、1623 年の出版) や quarto にこんにちの読みではあきらかに意味が通らない箇所が見つかる、編纂者は躊躇なくそれをあるひとつの合理性の原則のもとに書き換えてしまうのである。この種の作業をまったく行わない、いわゆるファクシミリ版が、それではオリジナルにもっとも近いのかといえ、そうとも言えない。そもそも「オリジナル」とは作品の諸段階、草稿、foul paper、fair copy、上演台本、版本、およびそれらの間の複雑に錯綜した中間的段階のうちの、どの時点でのテキストのことをいうのだろう。このことは、自分たちの版に寄せられた想像を超える批判に対しての部分的回答の意図で出版されたのであろう、*Oxford Shakespeare: A Textual Companion* に詳説された、当時の版本の成立事情に関する論述にも明白である。<sup>3</sup> すなわち、本論の冒頭近くでも簡潔に触れたように、これら当初の版本は、演劇作品の「作者」についての概念が未成熟だったところに加えて、それじたいすでにさまざまな「ノイズ」を含んでおり、さらにいえば、どこまでが「ノイズ」なのかさえ予断を許さない状況なのである。校訂とは可能な限り万民が合意できるように、そういった「ノイズ」を書誌学、文学のその時点での成果を総合的に反映しつつ、排除し、テキストを洗浄することを目指す行為と考えられる。しかしまさにその性格上、校訂(emendation)はすでに解釈でもある。ふたたび問題は冒頭のポスト構造主義的状況に差し戻されるだろう – すなわち「読むことは書くことにほかならない」。だがそれにしても、そもそも本文それじたいの実体が定まらないのに「シェイクスピアを読む」とはどういうことなのだろうか。テキストの曖昧さに関して決定的なことがなにも言えない以上、わたしたちは解釈史の伝統に依拠しつつもひとつひとつ細部の正確さを疑ってゆくほかはないのではないだろうか。たとえばオックスフォード版が提示する、folio と quarto それぞれに基づいたふたつの『リア王』を読む私たちの読書体験が、400 年にわたる解釈史のバイアスを、あらかじめ受けてしまっているために、テキストの欠落や過剰への意識なしには成立しないといったように<sup>4</sup>。

かかる状況をふまえてみると、たとえば作者不詳の詩がある日突然シェイクスピアの作品であるなどと認定されることがどれほど重大な事態かということが、少しわかってくる。「シェイクスピアの作品」の全体的特徴とは、なにしろ不確定

要素の集積の産物なのだから。1985年11月24日付け *Sunday Times* に掲載された短詩 'Shall I Die?' がその「発見者」Gary Taylor の手によって、彼自身の編集するオックスフォード版全集にシェイクスピア作として収録された「事件」は、まさにスキャンダラスという形容がふさわしかった。Bodleian Library の MS160 に所収のこの詩には、Rawlinson poet として知られる無名の写字生によって William Shakespeare 作と書かれており、これまでも E.K. Chambers をはじめとする数名の碩学の調査を受けていたが、シェイクスピアの作品とは認定されてこなかった。著作権についての意識が希薄な時代のことである。詩についても、それどころか公然と出版された芝居の本についても、テキストの権威や売れ行きの期待という観点から、'William Shakespeare' の名が冠されることは、当時は珍しくないことだった。「個人的な詩集の中で作者を詐称する意味はない」というのが Taylor の主張だが、マニスクリプトの筆者が誓って正確な真実のみを書いているとも断言できない。<sup>5</sup> はたせるかな、20ヶ所程異同があるものの、同じ詩がイェール大学のマニスクリプトコレクションに発見され、それは1630年代後半に活動したことが知られている人間によって書かれたものであり、シェイクスピアの名は記されていないことがわかる<sup>6</sup>。この時点ですでに、常識的な文献学者の判断なら、キャンノンへのこの詩の参入を思いとどまるべきだった。だが Taylor はまるでものに憑かれたかのように次のように主張して譲らない。

... the poem must be regarded as Shakespeare's until proved otherwise, ... unless this document's attribution can be disproved, this poem must be included in any edition of Shakespeare's works that claims to be "complete"<sup>7</sup>

'Shall I Die?' は凝った韻律構造をもちながら、むしろその制約ゆえに、語の用法、イメジャリーの独創性などに、たとえば『ソネット集』にみられるようなシェイクスピア的な要素が希薄であり、平たく言えば「へばな詩」に分類されてもしまいたないというのが、ルネサンス英文学研究者たちの多数意見である。<sup>8</sup>

数百年にわたるシェイクスピア受容史は、いわゆる Shakespeare Apocrypha と呼ばれる一群の演劇作品を、さまざまな根拠をあげつつキャンノンから排除し続けてきた。それは、まだ聖別されずに不遇をかこつシェイクスピアの傑作を発掘、再評価することへの夢に裏打ちされた、それゆえますます誠実な文献学的実践だったはずである。だが驚くべきことに、この詩がさまざまな角度からみてシェイクスピア作とは考えにくいとする多くの声にもかかわらず、'Shall I Die?' はオックスフォード版全集に収録され、Taylor は批判される度に、自説の論拠を縮小し

ていった。<sup>9</sup>そしてそれはもはやこの詩をシェイクスピア作であるとするには不十分なものとなったのである。

## 2 コンピュータ崇拜?

‘Shall I Die?’をシェイクスピアの作品とすることに疑義を呈し、有効な反論を展開した学者達のうちのひとりである Donald Foster が、1996年に *PMLA* で、1612年に出版された *A Funeral Elegy in Memory of the late Vertuous Maister William Peeter of Whipton neere Excester* (以下、*FE*) の表紙にある作者のイニシャル W. S. の正体をウィリアム・シェイクスピアと断じ、作品の分析を通じてそれを確信したとする語気には、Taylor を誘惑した悪魔が乗り移った感がある。およそ学究の徒にふさわしからぬ、疑義、反論にたいして耳を貸さない高圧的な姿勢がここでも印象的でさえある。ことシェイクスピアの作品の発掘となると、皆、理性のたがが外れてしまうかのよう。

*A Funeral Elegy* belongs hereafter with Shakespeare's poems and plays, not because there is incontrovertible proof that the man Shakespeare wrote it (there is not) nor even because it is an aesthetically satisfying poem (it is not), but rather because it is formed from textual and linguistic fabric indistinguishable from that of canonical Shakespeare. Substantially strengthened by historical and intertextual evidence, that web is unlikely ever to come unraveled. As a result, future editors will probably include *A Funeral Elegy* among Shakespeare's works . . .<sup>10</sup>

そして彼の予言通り、Norton, Riverside, Longman といった、アメリカにおけるシェイクスピア研究のスタートラインに立つ学習者たちにとっての基本的な諸版本のすべてに、*FE* は収録された。これがさらなるスキャンダルを巻き起したことは、インターネット上で展開されているオンラインフォーラムである SHAKSPER での壮大、壮絶な議論をはじめ、いくつかの学術的根拠の提示を伴う反論と、それに対する Foster の残念ながら学問的に誠実とはいいがたい再反論に克明に記録されている。<sup>11</sup> とりわけ争点となったのは、コンピュータによる文体解析をめぐるデータの質的量的問題、分析の手法の妥当性であり、統計処理や計算機操作にたいする苦手意識に支えられた文学研究者たちの信仰にも似た過剰な期待が Foster への反論を困難なものにしたことは否定できない。SHAXICON

と名付けられた、1996年にFoster自身のホームページ上で公開予定を宣言されながら本稿執筆時点で未公開の、それゆえ彼だけがアクセスできるという（それゆえ批判が不可能な）正体不明のデータベース SHAXICON による解析作業は、Fosterによれば、いかなる疑義をも払拭するに足るものはずであった。<sup>12</sup>だが彼の主張は、ほかならぬ彼が信頼し評価していたはずの計算機解析のエキスパートたちの反論にさらされることになる。<sup>13</sup> さらに、計算機に依存しない作品の精読による文体、主題、レトリックなどの研究が、*'Tis Pity She's a Whore* の作者として知られるJohn Fordの特徴と酷似するとのGilles D. Monsarratによる指摘をうけ、2002年6月、SHAKSPER上でFosterはFEの作者をシェイクスピアとする主張を撤回した。<sup>14</sup>

### 3 間奏曲

何かの偶然だろうか、Fosterがコンピュータによる解析結果を根拠にFEをシェイクスピア作と主張した1996年はまた、「サイエンス・ウォーズ」と呼ばれるスキャンダルによって記憶されるべき年でもある。カルチュラル・スタディーズ(CS)の影響が自然科学の領域にもおよび始め、「科学論」という領域が科学のレトリックを牛耳るようになると、それに危機感を感じた科学者の側から強烈な批判が起こった。CS陣営の側からこの批判に対抗すべく企画された*Social Text*誌の特集“Science Wars”に寄稿された論文のひとつが、じつは科学論のパロディ満載の悪ふざけだったにもかかわらず、査読をパスして論集に掲載された。論文の著者はみずから、自分の「論文」がでたらめなものであることを暴露して、「科学論」を支えるポストモダニズムの空疎さを狙い撃ちにしたのであった。<sup>15</sup> この種の欺瞞は善意と信頼に支えられた学問の世界の効率的分業に基づく進歩を脅かす行為には違いないが、すべてを相対化し、あらゆる権威・秩序にくってかかったポストモダニストの亜流の一派が、じつは裸の王様にすぎないことを暴露した点において、意義のある事件だったように思う。人文系諸学は、もしかしたらこの時期、自然科学の土俵にちょっかいを出しすぎて逆に引きずり出され、その品質と倫理を問いただされなければならない時期だったのかもしれない。

### 4 テクストのポリフォニー、そして「作者」の概念へ

以上に概説した二つの「事件」が起こりえた背景に、Brian Vickersは文学研究の本流とはかけ離れたメディアの狂奔、大文豪の「新作」を積極的に掲載することで売り上げを伸ばそうとする出版業界のありよう、さらにはそれに躍らされてしまう、本来影響力のある立場にいる学者、文学研究者たちの短慮をみてとる。

16 そもそも演劇作品と異なり、基礎データ量が少ない詩のテキストは数値化による近似・相関を確認することが困難である。また、「無作為」を意識するあまり、機械的にそこにある単語を切り出しても、ただちにそれが有効なデータとなるとはかぎらない一方、あまりきびしいフィルターをかけても、かえって「既知の事実の確認」にしかならないのでは無意味である。加えて統計学についての文学研究者の無知、苦手意識という問題もある。しかしそれでもコンピュータを使った膨大なデータの処理によって、演劇作品の共同執筆の分担状況などについての具体的な手がかりが提出されはじめた。データの信頼性と方法論の信頼性を同時に検証するという無謀に近い困難さを伴いつつも、作者同定をめざす文体解析研究は、少しずつ進歩してゆけよう。ここでは演劇作品のデータ解析の二つの（しばしば相反する）方向性を指摘して、作者同定作業の展望についての今後の指針としたい。

電子データ化された文学作品からコンコーダンスをつくり、そこから作者ごとに使用頻度の高い語、低い語、頻度の高い語順・組み合わせ、さらには contextual words, function words などを容易に取り出すことができるようになった現在、作者の文体の固有性を数値化して表現できるのではないかの期待が高まっている。これは stylometry と呼ばれる手法の一例であり、いわば統計学的文体論である。Contextual words に関しては、たとえば悲劇と喜劇では頻出する語彙の傾向が異なったり、あるいはそのジャンル固有の語彙の要請で作者間での差異、個性がかならずしもデータに反映されないのではと思いたくもなるが、non-contextual words の使用傾向と重ね合わせてみると、個々の作者の個性と作家間の影響関係はジャンルを越えて現れるという報告がある。<sup>17</sup>Merriam はクリストファー・マーロウの作品 *Tamburlaine the Great* に頻出する contextual words とマーロウとシェイクスピアの作品に頻出する non-contextual words をそれぞれキーにして使用頻度の高い順に二人の劇作家の作品を並べる作業を行った。それによると、キーとなる語の構成がまったく異なるにもかかわらず、マーロウの作品群は常に上位を占め、シェイクスピアの初期歴史劇がそれに続くという分布がみられる。同時代の他の作家、グリーン、キッド、ピールとの比較ではこのような規則的な分布はみられない。このことから Merriam はシェイクスピアの初期の作品 8 作にマーロウの筆が入っていた可能性を示唆するのである。ただし 8 作まででとりあえず共同執筆の可能性の高さを区切るのは、9 番目のシェイクスピア作品の前にマーロウの *Jew of Malta* が割り込んでいるという事情によるところが大きく、そうなると *Jew of Malta* が本当にマーロウの単独作なのかという意地悪な質問をしたくもなる。つまり、stylometry を援用した作者同定作業は、時にみずから



が立証したいはずの情報を適宜仮説に招き入れてしまうような瞬間があるのだ。逆にそうした分析によって、シェイクスピアの作品とは認めにくいものも出てしまう。*Henry VI* 三部作、*King John*, *Henry V*, *Titus Andronicus*, それに *Richard III* がその8作だが、はたしてシェイクスピア研究者たちがこれらを、たとえば最近同じような計算機解析の成果をうけてシェイクスピアのキャンノンに迎えられた *Edward III* と同じようにあしらせるか—つまり、少なくともキャンノンの周辺に追いやれるかということになると、現時点ではまだ慎重な立場が支配的ではないか。それほど上述の二つの詩をめぐる事件が深い傷跡を残していることの、これはひとつの証左でもあるが、同時に、どこで線を引くかという問題は、マーロウとシェイクスピアの違いを定義しようとする、言い換えればなにをもってシェイクスピア作とみなすかという、はかりしれぬほど大きな問いに挑むことでもあるのだ。

近年めざましい成果をあげつつあるいまひとつの分析方法は、'socio-historical linguistics' と呼ばれる分野から提供されている。とりわけ注目し値するのが Jonathan Hope の手法である。それによると、たとえばシェイクスピアとフレッチャーでは肯定文における助動詞としての *do* の用法に差違がある。シェイクスピアにおいて顕著なこの用法は、フレッチャーにはあまりみられない。のみならず、同時代の他の劇作家、先輩格のマーロウさえも、シェイクスピアほどこの用法を用いてはいない。英語が言語史的にみて激動期にあったこの時代、シェイクスピアの用法が古いものであるという指摘もできるが、それ以上にこの特質は作家の出身地、教育、階級などに大きく依存し、その生涯を通じて変化することがないという。<sup>18</sup> Hope はこの肯定文での助動詞 *do* の他、関係代名詞の用法、'you' と 'thou' の使い分けに絞り込んで、シェイクスピアとフレッチャー、シェイクスピアとミドルトンの共同執筆の具体的な分担、さらにはシェイクスピアの apocrypha をも分析する。そこでは *Edward III* はむしろ、シェイクスピア一人の筆である可能性が高いことが示唆される。<sup>19</sup>

シェイクスピア研究のプロでは、作家を愛するあまりに矛先が鈍って困るからというわけでもないのだろうが、stylometry の注目すべき成果を発表し続けている Ward Elliott と Robert J. Valenza はそれぞれ政治学、数学とコンピュータの専門家である。彼らが 1987 年以降クレアモント大学の学部学生とともに行っている Shakespeare Clinic という作業チームの報告によれば、*Titus Andronicus*, *Henry VI, Part III*, に加えてひとつの詩 "A Lover's Complaint" がほかの作品とは異なった要素をもつという。Merriam とは異なり、彼らの分析によると *Henry VI, Part II* は極めてシェイクスピア的、*Henry VI, Part I* はシェイクスピア作と

は言い難い、さらに、重要なことに、*Edward III*はおよそシェイクスピア的ではないという結果がでた。そして検証を重ねるほどに、「シェイクスピア単独の作品」としてあるひとつの芝居を決定することがますます困難になってきているというのが彼らの結論である(p. 210)。<sup>20</sup>

パラメータによってこれほど結果が異なってしまう以上、方法論としての stylometry は作者同定のツールとしては不完全と言わざるをえまい。しかしそれは逆に、それではシェイクスピア的であるとはどういうことなのか、という難問をわたしたちに突きつけてもいる。言語的特性をものさしにして計測した場合、ある作家がどういう姿をしているのか - コンピュータを用いた文体解析は、たとえば言えば、人物評価を DNA 解析で行うようなものかもしれない。作品の審美的要素をいっさい考慮しないこうした方法論が、いつかシェイクスピアを解剖し尽したとき、「作者」の概念はどのように変容するのだろうか。キャンノンと apocrypha の境界線が流動化しつつある現在、シェイクスピアはまだ謎のヴェールの向こうに、しかしそれでも確かに存在する。そしてそのヴェールを取り除くために導入された道具を、わたしたちはまだうまく使いこなせていない。正体を晒そうとしない作者の亡霊をしとめるために放たれた魔法の矢は、いまひるがえってそれを放った者に襲いかかっているのだ。

## 注

<sup>1</sup> ロラン・バルト、『S/Z』p. 8.

<sup>2</sup> Stanley Wells and Gary Taylor, eds., *William Shakespeare The Complete Works: Original-Spelling Edition*, カバー裏

<sup>3</sup> Stanley Wells and Gary Taylor, with J. Jowett and W. Montgomery, *William Shakespeare: A Textual Companion*.

<sup>4</sup> Gary Taylor and Michael Warren, eds., *The Division of the Kingdoms: Shakespeare's Two Versions of King Lear* 参照。

<sup>5</sup> Gary Taylor, 'Shakespeare's New Poem: a Scholar's Clues and Conclusions', *New York Times Book Review*, 15, December, pp. 11-14.

<sup>6</sup> Letters by Peter Beal and Donald Foster, *TLS*, 24 January 1986, pp. 87-8.

<sup>7</sup> Taylor, p. 14.

<sup>8</sup> Brian Vickers, 'Counterfeiting' *Shakespeare: Evidence, Authorship, and John Ford's Funeral Elegy*, pp. 1-53.

<sup>9</sup> *loc. cit.*

<sup>10</sup> Donald W. Foster, 'A Funeral Elegy: W[illiam] S[hakespeare's] "Best-speaking Witnesses"', *PMLA*, (1996) III: 1082-3.

<sup>11</sup> <http://www.shaksper.net/>ととりわけ 1996 年の議論が活発。なお、まとめられたものとして、<http://mbhs.bergtraum.k12.ny.us/cybereng/ebooks/fe-crit.txt>参照。

<sup>12</sup> Shaxicon とは、Foster によれば、シェイクスピアのキャノンの総体において出現頻度 12 回以下の単語 (rare words) を基にしたテキスト分析ツール。1995 年バージョンの同プログラムについての Foster 自身の解説は、<http://shakespeareauthorship.com/shaxicon.html>を参照。Vassar College の Foster のサイト <http://vassun.vassar.edu/~foster/shax/intro.html> は本稿執筆時点ではアクセス禁止となっている。

<sup>13</sup> 代表的なものとして、Ward E. Y. Elliott and Robert J. Valenza, 'Glass Slippers and Seven-League Boots: C-Prompted Doubts About Ascribing A *Funeral Elegy* and "A Lover's Complaint" to Shakespeare', *Shakespeare Quarterly*, 48: 177-207。なお <http://govt.claremontmckenna.edu/welliott/GlassSlippers97.htm>参照。また Foster (1986) の否定的な追試としては Hugh Craig, 'Common-words frequencies, Shakespeare's style, and the *Elegy* by W.S.', *Early Modern Literary Studies*, May 2002 <http://www.shu.ac.uk/emls/08-1/craistyl.htm>参照

<sup>14</sup> Gilles D. Monsarrat, 'A *Funeral Elegy*: Ford, W.S., and Shakespeare', *Review of English Studie*, vol. 53, no. 210 (2002)。これをうけたジャーナリズムの反応を二つ、紹介しておこう。New York Times, June 20, 2002 "A Scholar Recants on His 'Shakespeare' Discovery", <http://www.nytimes.com/2002/06/20/books/20SHAK.html>。もうひとつ、Sunday Times, June 22, 2002 James Bone の "Poem not Shakespeare's after all, scholar admits"と題された記事。これは興味深いことに、バーミンガム大学のサイトで読むことができる。

<http://mbhs.bergtraum.k12.ny.us/cybereng/ebooks/fe-crit.txt>。なお、検索ツールで key=Shaxicon でインターネットをあたってみると、学生向けの学習支援サイトでテキスト分析、作者推定などの有力なツールとして Foster の Shaxicon に言及するケースがことにアメリカの大学に多く見られることがわかる。これを早急に修正することが、大学でシェイクスピアを教える側の急務となっている。本稿で紹介したアメリカにおける 3 つの全集は、それぞれ訂正版を発行する見込みである。

<sup>15</sup> 井山弘幸・金森修、『現代科学論』、pp. 130-138 参照。

<sup>16</sup> Vickers, *ibid*.

<sup>17</sup> Thomas Merriam, "Tamburlaine Stalks in *Henry VI*", *Computers and the Humanities*, 30 (1996) 267-280.

<sup>18</sup> Jonathan Hope, *The Authorship of Shakespeare's Plays*, pp. 11-26.

<sup>19</sup> *Ibid*, p. 154.

<sup>20</sup> Ward E. Y. Elliott and Robert J. Valenza, 'And Then There Were None: Winnowing the Shakespeare Claimants', *Computer and the Humanities*, 30 (1996), 191-245.

## 参考文献

Craig, Hugh, 'Common-words frequencies, Shakespeare's style, and the *Elegy*

- by W.S'. *Early Modern Literary Studies*, May 2002.  
(<http://www.shu.ac.uk/emls/08-1/craistyl.htm>)
- Elliott, Ward E. Y. and Valenza, Robert J., 'And Then There Were None: Winnowing the Shakespeare Claimants', *Computer and the Humanities*, 30: 191-245. 1996.-----, 'Glass Slippers and Seven-League Boots: C-Prompted Doubts About Ascribing *A Funeral Elegy* and "A Lover's Complaint" to Shakespeare', *Shakespeare Quarterly*, 48: 177-207. 1997.
- Foster, Donald W., '*A Funeral Elegy*: W[illiam] S[hakespeare's] "Best-speaking Witnesses"', *PMLA*, (1996) III: 1082-3. 1996.
- Hope, Jonathan, *The Authorship of Shakespeare's Plays*, Cambridge: Cambridge UP. 1994.
- Merriam, Thomas, "'Tamburlaine Stalks in *Henry VI*, *Computers and the Humanities*, 30: 267-280. 1996.
- Monsarrat, Gilles D., '*A Funeral Elegy*: Ford, W.S., and Shakespeare', *Review of English Studies*, vol. 53, no. 210. 2002.
- Taylor, Gary, 'Shakespeare's New Poem: a Scholar's Clues and Conclusions', *New York Times Book Review*, 15, December, pp. 11-14.
- Taylor, Gary and Warren, Michael, eds., *The Division of the Kingdoms: Shakespeare's Two Versions of King Lear*, Oxford: Oxford UP, 1983
- Vickers, Brian, '*Counterfeiting Shakespeare: Evidence, Authorship, and John Ford's Funeral Elegy*, Cambridge: Cambridge UP, 2002.
- Wells, Stanley and Taylor, Gary, eds., *William Shakespeare The Complete Works: Original Spelling Edition*, Oxford: Clarendon Press, 1986.
- Wells, Stanley and Taylor, Gary, with Jowett, J. and Montgomery, W., *William Shakespeare: A Textual Companion*, Oxford: Clarendon Press, 1987.
- 井山弘幸・金森修, 『現代科学論』、新曜社、2000.
- バルト・ロラン、 沢崎浩平訳、『S/Z ハルザック『サラジヌ』の構造分析』、みすず書房、1973.

(岩手大学教育学部英語教育講座)